2020年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

生活科学部現代生活学科・須賀由紀子

② 事業名

大学生による地域の価値共有プログラムの開発
～地域と関わる「関係人口」の創出手法として～

③ 事業の目的

本事業は、持続可能な自立した地域社会づくりという社会課題のもと、「地域にとっての関係人口をいかにつくるか」をテーマに、「大学生が、地域の魅力に気づき、地域価値を共有するプログラム」の開発を目的とした。

④ 事業実績・研究成果（具体的に）

人口減少下、地域を支える社会関係資本を循環的に形成して地域の持続性を高めることを目的とする「高大連携まちあるきプログラム」の開発と効果検証を、2017 年度から継続して行っている。これまでの研究で、本プログラムは若者が地域に関心を向ける有効な動機付けとなること、また、地域住民と地域の価値を共有することが地域の関係人口への基点となることが確認されている（土屋・須賀 2017,2018,2019）。2020 年度は、これまでのまちあるきにゲーミフィケーション（楽しく夢中になるしくみ）の要素を加えて、誰もが参加しやすく、地域への主体的関わりを生むプログラムのモデル化を目指した。

具体的には、都立日野台高校を中心とする高校生（「ひのミラ」＝持続可能な日野の未来を創る高校生チーム）と大学生、および日野市の３者が連携して、SDGs を共通テーマとするまちあるきプログラムの開発を目指した。Covid-19 の影響によりまちあるき自体は実施することができなかったため、個人もしくは小グループで日野市の地域資源をピックアップして現地視察およびインタビュー調査行い、それら地点を SDGs 目線で解釈したマップの作成を行った。月１回程度リモート研究会を重ね、2021 年 2 月 6 日（土）「ひのミラ文化祭 （オンライン開催）にて、「探索型まちあるき SDGs マップ中間報告会」として活動成果発表を行った。

活動成果として、日野市の地域資源 Toyoda Beer についての SDGs 視点からの価値の再編集、および日野市の「子育て支援の居場所」に着目をした SDGs マップが生まれた。そして、各人が関わった地域に SDGs の視点を絡めることで、SDGs 理解と地域の価値共有ができることが明らかになった。事業に関わった大学生の記述からは、SDGs への興味関心、理解の促進、自分たちが関わりを持った地域（日野市）への関心の高まりが確認された。

本年度の取り組みを通じて、どの地域にもある「地域資源」に出会える場所をプロットし SDGs の解釈を加えていくことで、SDGs の理解と地域の良さへの気づきにつなぐプログラムができることが検証できた。SDGs ゴールを探しながら、自分の関わるいろいろな「コト・ヒト・モノ」に思いを馳せ、その都度ゴールを新たに設定しながらまちを整えていくことこそが、定住人口と関係人口が交わる地平となりうる。自分とまちが関わるストーリーと SDGs とを絡めながら、まちについて、自分の生き方について考えを巡らせていくことで、持続可能な地域社会を考えるまちあるきプログラムができることが示唆された。

⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

・土屋薫・須賀由紀子：学生による地域の価値共有プログラムの開発～地域と関わる「関係人口」の創出手法として～、江戸川大学紀要第 31 号、pp.87-96、2021

⑥ 今後の展開・継続性について

今年度取り組んだ、SDGs 視点で地域価値共有を行う「SDGs マップ」を発展させて、「発見」と「出会い」を伴う「探索型まちあるき」手法の開発を行っていく。まちあるきに ICTを活用し、多様な世代が交わり、誰でも楽しく参加しながら SDGs 目標 11「住み続けられるまちづくり」につなぐ「ハイブリッド型 SDGs まちあるきプログラム」のモデル化を目指す。それに適したまちあるきプログラムと ICT 活用アプリの開発を、日野市企画部ほか関係部署との連携して行っていく予定である。